

地域の祇園祭と米

— 田島祇園祭の独自性と米の関連 —

遠藤 由起

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Gion Festival at the local place and rice

- The Relationship between the Originality of the Tajima Gion Festival and rice-

ENDO Yuki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In Japan, various festivals are held throughout the year. When rice farming had started in Japan, rice crops plays one of the main roles for basic need of Japanese people and the society, as the rice and money has an equal value historically. In the rural areas of Japan, festivals are done to pray for bountiful rice crops are give thanks as people from sickness and disasters, typically the Kyoto Gion Festival.

The Tajima Gion Festival is one of the Gion festivals in the local place which have been done based upon the Kyoto's prestigious Gion Festival. Originality can be found in the way rice is handled at the Tajima Gion Festival.

It also shows that rice and Sake brewing is one of the major industry in this place. The uniqueness of the way rice is treated at Tajima Gion festival, such as "cloudy sake," is an emergence of the hearts of people who have lived and continued the festival here. It is thought that the originality of the way of treating rice seen in this festival influences each person daily life who are concern with the festival ,and the people who support the festival as well.

1.はじめに

日本においては、各地で農村地域の秋祭りをはじめ、夏の都市祭礼の代表的存在である祇園祭など、様々な祭礼や農耕儀礼が執り行われてきた。一年中、日本のいたるところで伝統の祭、あるいはイベント色の強い新しいタイプの祭が行われている。日本は昔から、祭が盛んな国である¹といわれ、大小あるいは新旧に様々な祭を作り出して維持し、祭を日々の生活のリズムに取り入れてきた。祭は地域の人たちが、誇りをもって大事に受け継いできたもの²でもある。

日本の祭の成立とその目的の中心には、稲作と米

の存在がある。新天皇の即位にあたっては、日本最大の国家的祭祀である「大嘗祭」が執り行われる。この祭祀は国家最高の儀式として、新天皇が国の社会・経済的基盤となる米作りや農耕や含む祭祀を司る、新天皇の交代儀礼でもある³。このように日本では、国家的な祭祀の大嘗祭はじめ、農村各地で様々な農耕儀礼を行なってきた。そしてこのような祭祀儀礼は、主食として日本社会の生命を支えてきた、特別な穀物である「米」と密接な関連がある。

日本で行われる祭は実に多様である。祭はさらに人口の多い都市で行われる都市祭礼と、稲作を主に行なう農村における農耕祭祀、儀礼に分けられる。

さらに広義には、現代的な新しい意味合いを持つイベントや商業色の濃い祭も含めることができる。これらのいずれもが、祭の行なわれるコミュニティ内外のメンバーと、その祭に足を運ぶ多数の人々から成り立っている。祭の運営と実行を担う地域共同体の人々や、祭に集まる多くの人たちを抜きにしては日本の祭を論ずることはできない。

都市部における祭礼には、歴史的に都市ならではの目的や効果を求められてきた。一方の農村においては、日本人にとって特別な穀物である米の豊作を感謝し、またこれを祈願するという比較的明確な目的が認められる。いずれにしても共同体の人々は、祭や儀礼を執り行ない、効能を期待する土地の神や日本の神などを祀ることで、共通の生活上の問題を解決しようとしてきたこと、また祭を行なうことで、共同体の構成員としての意識や結束を高め、また補強してきたといえる。

このように日本の祭は稲作や米との深い関連をもって歴史的に成立してきた経緯がある。他方で、日本の祭はそのような歴史的背景のある目的とは別に、これを成立させ、維持させてきた人々と共同体、そしてそのコミュニティを越えた多くの人々を結集させるという、重要な役割を果たしていると考えられる。

本稿では「地域の祇園祭と米」をテーマとして、地方の一祇園祭における「米」の役割の独自性、日本の地方の祭と米の関連性について、フィールドでの観察から得た知見を基に考察する。

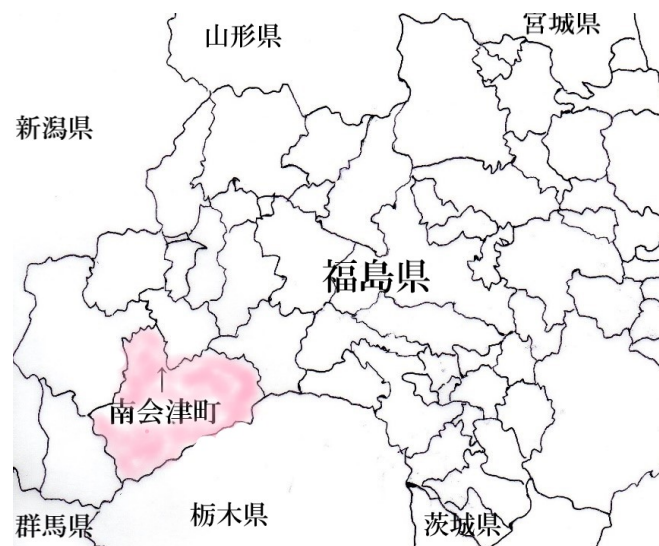
2. 田島祇園祭の成立と歴史的経緯

福島県の南西部に位置する人口1万5千人余りの南会津町では、毎年7月22日から3日間に渡って、「田島祇園祭(たじまぎおんさい)」が行われる。この祭は、1月15日に始まる「お党屋御千度」といわれる行事をはじめとして一連の神事、行事全体が、国指定の重要無形民俗文化財に指定されている。祭の歴史は鎌倉時代の1185年(文治1年)に遡る。

文化財に指定された名称からも明らかのように⁴この祭の行事の一切は「お党屋行事」として、祭を担う地域の人たちなどから構成される「お党屋組」⁵の人達を中心となり、その維持と継承がなされてき

た。

・南会津町の所在地(2019年9月30日現在)



『分県地図7 福島県』(昭文社, 2018年)を元に筆者作成

農村においてこのような夏の都市祭礼である祇園祭が行われるのは異例とされる⁶。鎌倉時代の文治年間、当時の領主長沼宗政が牛頭天王須佐之男命を招聘した。田島祇園祭は長沼氏の祇園信仰によって京都の祇園祭を模した形で祭礼格式を定め、さらに土地の神を祀った田出宇賀神社の農耕儀礼と融合した形で発展を遂げてきた。またこの祭には「どぶろく祭」や「ふき祭」という別名がある。この日のために毎年製造される濁酒や、地元の婦人たちによるふきの煮物が御神事に供えられ、人々の直会に饗されるという伝統である。この土地で出来た米を用い、古くから祭の時にだけその製造を許されてきた濁酒を、神と人々がともに味わう伝統と習わしは、この地方における一祇園祭の特筆すべき点である。この祭を観察した柳川啓一は「田島祇園祭の「おとうや行事」においては「酒と食物が人とのつながりを確かにする重要な媒介となる」⁷と述べている。

田島祇園祭は長い歴史の中で、中断を余儀なくされた時期があった。戦国時代の1590年(天正18年)、会津を攻めた仙台領主伊達政宗とともに、長沼氏もこの地から移ることになった。そのため、長沼氏が盛んに行なってきた祇園祭も一時期途絶えてしまっ

た。祇園祭の無い十数年という月日に耐え難くなっていたこの地の人々は、伊達政宗の後、豊臣秀吉の重臣として会津にやってきた蒲生氏郷により田島城代に任じられた小倉作左衛門にあてて、1603年（慶長8年）に「祇園祭復興願」を提出した。作左衛門はこれに対し、槍と思われる長器を行列に加えることを禁じたのみで、昔からの作法にのっとりこの祭を執り行なうことを許した⁸。この年の復興から一度も途絶えることなく、田島祇園祭は800年の間続けられてきた。この例からも祭は日本人々、ひいては世界中の人々を動かさずにはおかないものであり、いつの時代も社会や人々を活気づける非日常の装置であるといえる。

祭の伝統格式を伝えるのが、牛頭天王須佐之男命を併せて祀る土地の神社、田出宇賀神社である。そして江戸末期の1826年（文政8年）に整えられた田島祇園祭の祭礼格式は、明治期の近代化を経てなお固有の信仰を失わずに、一方で社会の変化に対応しながら現在の祭の継承に至っている。1913年（大正2年）には、民俗学の父と言われる柳田國男がこの田島祇園祭を訪れた。柳田は論文「日本の祭」の中で、田島祇園祭で見た「七行器（ななほかい）」という形式の献饌について「今でもそういう形をまだ保存している」⁹とふれている。そして「（国の祭色の統一ということは飲ばしいが）そのために特殊神饌が省みられなくなったものが多く（略）」¹⁰として、祭の古い形に見出せるような祝祭における神と人との共食についての持論を展開している。また祭の形式に「変遷があった」ということを、心に留めておくべきであろうとも述べている。

日本の多くの祭を支える人々と同様に、田島祇園祭を維持、継承し、あるいはこれを楽しみに訪れる人々にとってもある意味では、祭は生活そのものといえるほど日常の生活と密接である。柳川は「宗教は社会的統合を図る機能を持つ」という社会学者のデュルケムの論を援用しながら、田島祇園祭においても「この祭が田島町（現南会津町）の各地域を大きく統合する意図を示している」¹¹と論じている。

古来より非日常のハレの行事であった日本の祭は、神の恩恵に感謝することで神々と人々がつながり、

生活や社会をつないで活気づけるような、神聖な非日常装置の効能を果たしてきたといえよう。

3.祭の神事と国指定重要無形民俗文化財の「お党屋行事」

田島祇園祭の伝統的な形態は、1981（昭和56）年に国から重要無形民俗文化財として指定された「お党屋制度」という祭の組織によって維持と継承が図られてきた。現行のお党屋行事は田出宇賀神社に現存する1825年（文政8年）の『文政八年牛頭天王渡御御党屋敷書』と呼ばれる書物で細かい規定がなされており、時代の推移による変遷と改定を加えながら現在に至っている。一方で、格式については江戸時代の祭礼格式から大きな違いがないまま保存されてきた¹²。このお党屋制度の起源は当時の当主長沼時代の祇園祭にあるというよりも、それ以前から行なわれていた地域の祭の「とうや制」にあり、それが次第に町方の祭として継承されたとみるべきだとされる。また「お党屋組」組割の一つの町で配布されたリーフレット（2018年版）にも、祭の起源は「田の神」の祭であると記されている。いずれにせよ、注目すべきなのは現在に続く田島祇園祭が「お党屋制度」という方法と組織によって維持、継承されてきた点にあるといえよう。

田島祇園祭では町内で「お党屋組」といわれる組割が行なわれ、1組が20軒から30軒程度の組員で組織される。しかし、町の人口の移転や減少によって、組数も組員も減少の一途を辿っているというのが現状である。お党屋組は前後3年に渡り、祭における使役を務め、祭の運営を協力し合う。

お党屋組やそのリーダーである党本には、神事にあたって厳しい禁忌が設けられてきた。日本の祭では、古来より罪穢れを祓う役割を担い、罪穢を極端嫌う。祭のしきたりには、女人禁制の禁忌も残っている。文政8年の『牛頭天王渡御御党屋敷書』では祭の3年前から肉食が禁じられる嚴重なものであった。近年ではこれを7月から祭儀終了までとし、家族の一人のみが厳守するという緩やかなものになっている。

祭にあたって、死穢の禁忌は嚴重である。忌中期間にあたる者は一切の神役を除外される。7月7日

にはお党屋組に注連縄が張られ、「潔斎」の期間に入った後は死家に入ることを許されない。田島祇園祭での禁忌は古くから細かく定められ、それが守られてきた。田出宇賀神社の宮司にあつては、京都八坂神社の家紋に敬意を表して「胡瓜は一年を通して食べない」という禁忌も守られている¹³。

田島祇園祭の行事の全てが、町の当番お党屋組を中心に行われる。祭の神事の一部はお党屋組の代表である党本宅に、特別に設けられた神棚にて執り行われる。この神棚は、祇園祭のために臨時かつ特別にしつらえるのだが、その起源は神社の宮司が神事を司る以前の古い時代に求められるとされる。お党屋組の党本は、祭の運営を担う町民の代表として宮司の役を務め、祇園祭の神事の進行を担ってきた。党本宅は「本陣」とも呼ばれる。党屋本陣に掲げられた看板には、京都の祇園祭と同様に「(神輿渡御の)御旅所」の文字もみられる。「お党屋行事」は神社における神事と並んで一切を進められる。以下、一年に渡る田島祇園祭の「お党屋行事」について概略を記す。

・田島祇園祭・お党屋行事概略

- ・1月15日「御党屋御千度」(大盃廻し)
- ・6月30日「大祓いの式」
- ・7月6日「御神酒もと仕込み」
- ・7月7日まで「家屋の準備」、「食糧・燃料の準備」、「御下賜」
- ・7月7日「参道掃除(道作り)」、「お党屋注連縄張り」、「注連縄張り御神事」、「献立の準備」、「道路使用許可願の提出他各種通知・届」、「高灯籠と行燈立て」
- ・7月9日頃「御神酒(濁酒)仕込み」、「招待状の発送」
- ・7月18日「参道・境内清掃念達(来年度のお党屋への念達)」
- ・7月20日「盛砂運び」、「御神橋架け」、「諸道具運び」、「神輿台組立」、「党本幕打ち」、「高張提灯立て」、「テント張り」
- ・7月21日「屋台作り」、「御神酒運び・御神酒引き割り」、「神棚吊り御神事」、「御神酒開き・直会」
- ・7月22日【例大祭】「例大祭神事」、「大屋台運行」、

「請取渡し呼び使い」、「夕御饌神事」、「屋台世話人接待」

- ・7月23日【渡御祭】「榊迎え」、「七度の使い」、「七行器行列」、「御神輿渡御」、「神輿前神事」、「御鉢前神事」、「御神輿還御」
- ・7月24日【太々御神楽祭】「太々御神楽奉納」、「帰座の神事」、「諸道具引渡し」、「御幣奉鎮」、「行事完了直会」

『会津田島祇園祭』(1977)¹⁴,
『田島祇園祭のおとうや行事』(1986)¹⁵,
「2018年版 会津田島祇園祭パンフレット」
(2018)¹⁶,
「令和元年本町上組御党屋行事日程表(非公開)」(2019)を参照

以上が一年に渡って実施される田島祇園祭の「お党屋行事」である。神を祀るその神役として1月の雪景色の中、祭最初の行事である「御党屋御千度」では、当番お党屋組の各戸から男性が一人ずつ、紋付き袴に草履という出で立ちで御千度参りを行なう。こうして祭の無事と安全を祈願することから祇園祭は始まる。午後6時、提灯を手にした迎えの家人が集まって来ると神社では日本酒が八合入った「神酒大盃(大盞という)廻し」が行われる。お党屋組の男性たちはこれを一杯ずつ飲み干さなければならない。祇園囃子が鳴り響き、酔った一行が帰路を歩いていくと、町の人たちに今年の祇園祭の始まりが告げられる。党本宅では家屋の新改装などに加え、食料や燃料の調達といった祭に向けての準備が続いていく。6月30日、祭に奉仕するお党屋組の者が神社拝殿で祭の無事を願ってお祓いを受ける「大祓いの式」が行われる。この「大祓いの式」は全国の祭にもみられ、その源流は古い。7月7日からはお党屋組中に注連縄が張られ、祭前の潔斎に入る。祭礼が終わるまで、これらの禁忌が厳格に守られることで、祭りの厄除けといった神の御加護が受けられるという信仰である。参道には高灯籠が、神社の入り口には祭礼旗が立てられる。

9日ごろ、縁起の良い日を選んで田島祇園祭の別名にもなっている「どぶろく(濁酒)」の「御神酒

仕込み」が行われる。古くはお党屋宅内で田島祇園祭の御神酒の濁酒が仕込まれていた。明治時代に酒税法が施行されて、許可地以外での醸造が禁じられた。数回にわたる申請の末にようやく、田出宇賀神社に「御酒製造許可」が出されて以来、神殿にて御神酒の濁酒製造が行なわれている。御神酒の製造は、地元の国権酒造株式会社の杜氏が指導を担当し、当番お党屋組はその使役を務める。この酒造りも女人禁制である。御神酒の稀少さからか美味しさからか、毎年遠方からこの御神酒を楽しみにやって来る観光客は絶えない。7月20日になると党本宅前に、神輿に載った神のお通りになる「御神橋」が架けられる。この橋を渡るのは、神と宮司と党本のみである。例大祭前日の21日には大屋台の組立てと、党本宅の神棚吊り、御神酒開きなどが執り行われる。

7月22日に入り田島祇園祭の例大祭、23日の渡御祭、24日の太々御神楽祭と、年に一度の祭の行事が続く。本祭の渡御祭では、神社までの往路で朝7時過ぎに党本宅を出発する「七行器行列」が練り歩く。「花嫁行列」とも呼ばれるこの行列は、古式の形の残る神饌を七つの「行器」に入れて神前に運ぶ奉納行列である。この行列は地元や地元ゆかりのある未婚女性などが昔ながらの高島田で参列し、絢爛豪華な彩りを呈することから、祭の大きな呼び物の一つとなっている。行列が練り歩く時間には、カメラを持った人々で参道の沿道が埋め尽くされる。行列に先立って、神の来臨を願い御神酒、赤飯、鯖が七つの行器に入れられる。これを奉持する両親のそろった家庭の子どもを先頭に、行列の参加者が続く。七行器は、行列の参加者が交替で運ばれる。行列は神社まで一時間前後の道のりとなる。この行列は党本宅から神社までの往路である。神社から党本宅への復路は、京都の祇園祭と同様、「神輿渡御」が行なわれる。神社に祀られる牛頭天王須佐之男命は、いかなればその荒々しい力によって浄化を求められて神輿に載っている。その神輿を使役の者たちが運んで、町中を浄めていく。神は党本宅前に作られた「御神橋」を渡って党本宅に入られる。神輿は党本宅前の設置場所に一時置かれる。党本宅ではお祓いのための米を撒く「お鉢米の神事」が執り行われる。

最終日には神殿脇の神楽殿にて、太々神楽が奉納

される。この神楽は楽人による調べと拍子のみで進行し、無言のうちに執り行われることになっている。神楽は江戸時代、郡山市の安積国造神社から伝習されたといわれるものである。現在も地元の人たちによる太々神楽奉仕会で保持されている。祇園祭近くになると、伝統の調べを響かせながら小学生が練習する姿もみられる。こうして1月15日から始まった田島祇園祭のお党屋行事は、7月24日の太々神楽奉納をもって締めくくられる。

中世中頃までは、日本の村には神事を執り行う「神主」は存在せず、村人の中から神主の役を担う者を選んでいとされる¹⁷。江戸時代に入り専門の神職が誕生し、日本中にその制度が整備されるようになると、祭の神事は神職に委ねられ、村人=氏は補助的な役目を担うようになった。「とうや」には多く、旧家や有力な商家の者が選ばれた。中世後期には「宮座」とよばれる、村の有力層からなる村の氏神を祀る村役の制度が存在した。一面で排他・特権的な性格をもつこの宮座は、関西や近畿地方に多く認められる。宮座は関東や東北地方ではほとんど見られず、田島祇園祭に存在していたかどうか資料がないので定かではないとされる¹⁸。2018年の筆者の聴き取りでは、地元の旧家が古くから党本を務めてきたという見解も聴かれた。あるいはまた、そのような多くの人が集まりやすい旧家や商家だからこそ、祭による「厄除け」の必要性が感じられたのかもしれない。

いずれにせよ一連のお党屋行事と準備、伝統のしきたりの煩雑さや経済的な負担などを鑑みると、新参家庭や核家族、お党屋組以外の家庭が党本を担うことには多くの困難がつきまとう。しかしこのお党屋制度がなければ、経済的にも精神的にも決して負担の少ない田島祇園祭の中の伝統や祭式を保つことはできなかつたといえよう。お党屋制度や田島祇園祭の維持と変容過程、再編成を通し、南会津町（旧田島町）の人々が世代間の継承と地域の紐帯を図ってきたことに疑いの余地はない。デュルクムのいう祭の宗教的要素が社会の統合を果たすという機能は、現在の田島祇園祭においても確認することができた。例えば筆者が田島祇園祭を観察中、ある若者がお党屋組に入り、今年初めて父親に代わって「御

神酒仕込み」を手伝ったという話を聴かせてくれた。また、2018年の祇園祭当日のニュースでは、七行器行列に参列したカナダ出身の女性が「せっかく（南会津町の）近くの市に住んでいるので（田島祇園祭の七行器行列に）ぜひ参加したいと思った」と報じている。

この七行器行列についても、年々女性参加者を集めることには苦心している。参加女性の衣装やお支度にかかる負担の大きい事は事実で、町が補助金を出すなどの対策をとっている。また人口の少なさ等の問題から、先述のような外国の女性に参加を依頼したりもしている。行列が祭の最大の呼び物となっていることからわかるように、祭におけるこの七行器行列の観光資源としての集客力は相当なものである。京都祇園祭には「山鉾巡行」というメインイベントがあるが、山鉾の美術的価値に相当するのが、おそらく田島祇園祭ではこの「七行器行列」であろう。神社へ奉納するという神事としても大きな意義を持つものといえる。筆者の聴き取りでも、町内の未婚女性は、一度は行列への参加を体験したほうがよいと考えている家庭が多かった。行列に参加した女性たちや親御さんの話を聴くと、2代、3代と同じ経験を共有しているなど、どの人にとってもマイナスの意味づけはなされていなかった。町の人々にとって、祭や行列にまつわる考えや意識自体が、一種のアイデンティティ確立と再確認の機会であるともいえそうである。

都市部の祭礼では、これを支える住民の出入りが激しく、その地に代々住み続けてきた人の方が少ない。外部からの学生や新興住宅の住人などと従来からその地に住む住民が一体となって祭を支え、そのことを通して社会的統合が行われているという事例が多く認められる。大森は、柳田が「祭にあるのは信仰ではなく信頼である」といった説を引いて、祭りでは最終的に神輿や屋台、山車など「みんなでいっしょに物を動かすことによって、コミュニティの間の信頼を醸成する」と述べている¹⁹。

伝統とは時代の変遷とともに、これを支え、受け継ぐ社会や人々があってはじめて存在できるものである。そして必要な再編成や変容を伴いながら、みんなで受け継いでいくものと考えられる。祭の賑

わいや楽しみは、特権を持つ一部の人々や地域の人だけのものではない。祭がもたらすつながりは、人間の作った境界や差異をいともたやすく乗り越えてしまう。また祭に血をたぎらせるのは日本人の人々に限ったことではなく、人類に共通の心情でもあるだろう。日本人の人々と地域の共同体は、祭と祭の生み出すつながりによって、何度も絆を新たにしてきた。そして祭のもたらす紐帯や絆を育くむ中で、その日常生活をも営んできたのであった。

日本人の人々は祭が境界を越えたつながり、差異を越えて心をつなげることをよく知っている。だからこそ田島祇園祭でも一時の中断を経てもなお、町の人々が一体となってこの祭礼を復興させることができたということが改めてわかった。

4. 農耕儀礼と都市祭礼の融合と「お党屋組」による継承

祭は非日常の出来事であり、これが日常の生と密接に結びついて展開されてきたことは先述した通りである。そして日本の祭の原点は日本人の経済と生命を支えてきた社会的な作物である「米」を作る稲作文化に求められ、農村における豊作祈願が主であった²⁰とされる。

このような豊作祈願の農耕儀礼や祭祀は、米や作物の収穫が済む頃、秋祭りとして主に農村部で行なわれてきた。農村の祭は地域共同体の人々の生活にとりわけ密接なものであった。現在では都市化した地域でも、農耕儀礼の名残をとどめつつも変容を遂げた形で、いろいろな秋祭りが行なわれている。

田島祇園祭の成立と経緯を辿ると、土地の田の神を祀って豊作を感謝、祈願する農耕儀礼と、時の領主であった長沼氏の牛頭天王素戔鳴尊の招聘による京都祇園祭の形式との融合によって、現在の形につながる田島祇園祭が成立してきたことがわかっている²¹。

祭は宮司によって神社内で執り行われる御神事と、祭の運営を担う町民から成る「お党屋組」のリーダーである「党本」の自宅で、宮司を招いて行なわれるお党屋行事、神事が並立して進行し

ていく。これら一連の祭の行事、つまり神饌の調理、進献、神事の一切、付随する芸能にいたるまで祭の全ては、この「お党屋組」という祭礼組織によって規則正しく執り行われる²²。古式の祭式が継承されている現在も、祭専用の祭壇がお党屋本宅に作られる。ここに神事の専門家である宮司を招いて「神降ろし」の儀を行ない、祭の神である牛頭天王須佐之男命が臨時の祭壇に鎮座されて、祇園祭が執り行なわれる。筆者が行なった2019年のフィールド調査では、祭の期間は祭壇に灯された火を絶やさないように細心の注意を払うとか、行事に用いる神聖な米が祭壇に供えられるなど、古い時代、おそらくはこの祭の成立当初から守られてきたしきたりや禁忌が今も脈々と受け継がれている様子が見られた。お党屋組のメンバーも党本も、それを取り立てて特別な事とも思わず、祭はそういうものでずっとそうしてきたからそうするだけのこと、というくらいの気持ちで取り組んでいるという印象を受けた。しかし、祭を受け継いでいる人々にとっては当たり前と思える一連の行事としきたりが、この感覚を共有していない者や外部の文化になじんでいる者にとっては珍しく、奇妙にさえ感じるものでもあることだろう。何よりその維持と継承にかかる負担と費用の数字が端的に示すように、祭の伝統のしきたりや祭式を守って受け継いでいくことは、非常に重要だが困難なことでもあるといえる。

2019年のフィールド調査における聞き取りでは、祭を担うお党屋組の男性メンバーから、伝統の祭の維持継承の困難さを十分に踏まえた上で「この祭を残していきたい、という気持ちが強い」という声や、「小さい時から身近だった田島祇園祭だから、個人的にはいろいろなことがあっても血が騒ぐ」という声が聴かれた。他の祭と同様、田島祇園祭でも表面的には祭に夢中に見えるのは男性であり、一部の行事では女性の参加の禁忌も守られてきた。だからといって、祭の度に裏方仕事を当前のように引き受け、これを支えてきた女性たちの努力について、祭に血をたぎらせる男性たちが全く理解していない、というのではなさそうであった。祭運営のリーダーである党本は、

女性陣の苦勞をねぎらうように「女の人たちがいないと、祭にはならないということがわかってくれたらいい」とも話していた。

お党屋組のメンバーは、基本的には組の地区内に居住する夫婦、とされている。男性は男性の持ち場、女性は女性の持ち場があって、それぞれに祭の運営を担って支えてきた。近年では、地区以外の住民、独身者、あるいはこの地に一時的な住まいを持つ人たちなどがお党屋組に入るとか、お党屋行事のボランティアを行なうなど、祭の運営を様々な形で支えている実態が見られた。むしろ、そのような比較的地縁的なつながりの少ない人たちや、仲間意識をもって受け入れられた多くの人達が祭に熱意をもって参加するという一方で、古くからの祭の維持、継承が補強されているともいえよう。祭はこのような地縁を越えた人々の間にも新たなつながりを創出している。

党本の語りにあったように、祭を裏で支えるのは紛れもなく女性たちである。加えて、祭に熱意を持ち、意義を認められるような地域共同体を越えた多くの人々と、因習に囚われることなく伝統を継ぐ可能性のある若者、子どもたちなくして、今後「お党屋行事」という文化資本を継承し、これを時代に合わせた形で変容させ保持していくことは不可能である。他方でこの伝統の祭を支え続けてきたベテランメンバーは、受け継がれてきた伝統としきたり、そして祭に対する経験と思いを最も体現している人たちだといえる。フィールド調査では、この祭を支え担う全ての人々が、祭の一連の作業や行事を進めていくことを通して、互いの役割や違いを認めた上で、祭に向けた心意気の一つにして絆を再構築していく姿が見出された。そしてこの地域でも、様々な面で決して負担が少なくはない伝統の祭を失わないために、人々が結束してきたのだということが改めて理解された。

5. 「どぶろく祭」と町の人々 —フィールドでの聞き取りから—

田島祇園祭には「どぶろく祭」という別名がある。というのも、祭に先立って特別に許可を得た「どぶろく（濁酒）」が醸造され、これが御神酒

として神に奉納される一方、参拝客に年に一度振舞われる習わしがあるためである。

祭が行なわれる福島県の南会津町（旧田島町）は、古くから稲作とともに酒造を主要産業にしてきた。その酒造技術は全国新酒鑑評会で10年連続1位に輝く酒蔵をはじめとして、従来から高く評価されてきた。

毎年、地元酒蔵の杜氏の指導の下に祭の御神酒が作られる。天候によっても出来栄が大きく左右される年に一度の御神酒は、祭に訪れる全国各地からの参拝客の大きな楽しみにもなってきた。民俗学者の神崎宣武はこの祭を調査して、古式さながらの御神酒造りを伝承する数少ない神社があると紹介している²³。その際、神崎の聴き取りで田出宇賀神社の宮司が

「祭り本来の姿を伝えているだけで、どぶろく祭りといわれるのは本意ではありません。（略）正統なことを伝えようとすると、特殊視される。それは、あまりありがたいことではないですね。（略）祭りを維持していくのは大変ですが、長い歴史を考えると、どうしても私の代で終わらせたくないと思う。先代もまたその先代も、結局そういうことでがんばってきたんではありませんかね。」

と答えている²⁴。現在、田出宇賀神社の宮司は代替わりしている。2018年と2019年の7月、神社の神殿で行なわれる「御神酒仕込み」の神事の際に筆者が行なったフィールド調査²⁵では、当代の宮司も先代と同様、製造する御神酒を「どぶろく」と呼ぶことには賛成ではなく「どぶろくとはいわずに「御神酒」と言ってほしい」と話していた。

御神酒の完成時に行なわれる「御神酒開き」では宮司は「今年もいい御神酒ができたそうですね」と語っていた。この「今年も」という言葉に、この祭を継承してきた代々の宮司と、町の人々の思いが表現されているとも捉えられるだろう。

一方、町の人々の代表であるお党屋組の男性たちは「御神酒開き」の作業に熱中していた。ろ過

作業を行なうためにお党屋組の党本宅に運ばれた御神酒のタンクのまわりには、出来立ての濁酒の香が広がっていた。自分の分担もそこそこに、男性たちのほとんどがろ過作業に集まってしまった。作業の全てが手作業で行なわれるため、男性たちが交代で力仕事を行なう。その最中も男性たちは時おり冗談を飛ばすなどして和気あいあいとした雰囲気の中に作業を進めていった。こうして否が応にも祭の気分が高まっていく。今年の御神酒を神に奉納する前に味見して、出来栄を評価するのも毎年の恒例行事である。冷静沈着な女性たちを横目に、男性たちによる御神酒造りの仕上げは盛り上がっていった。

町の代表として祭を担うお党屋組の人達にとって御神酒は喜ばしきアルコール飲料であり、自分たちの町の産業の誇りでもあるだろう。祭の時に、一年に一度だけみんなの力で御神酒を作り、味わうことが許される。「御神酒作り」も「御神酒開き」もこのように人々にとって特別な意味を持つことになる。自分たちの住む地で作った米を使い、地域共同体の人たちが立場や世代の違いを越えて、神に奉納し祭の参拝客にふるまうための御神酒作りで力を結集させる。女性たちも、祭の成功と御神酒の完成を願いながらその結束を陰で支えている。そのようなつながりを、長い間この地の人々は祭を通して培い、守り通してきたといえるだろう。

御神酒であっても「どぶろく」であっても、この地で祭のための御神酒を作る作業や神事を通し、地域共同体の人々は自分たちの間の結束と絆を強くしてきた。そして祭が終わった後も人々はそのつながりを回帰させ、自分たちの新たな日常を展開している。

6.田島祇園祭の中の「米」の独自性

田島祇園祭が開かれる南会津町（旧田島町）は、農業と酒造技術をその主要産業としてきた町である。このような町で毎年、年に一度行なわれる大祭礼である田島祇園祭は「祇園祭」を冠し、京都祇園祭の祭礼格式に則った神事と行事を行なってきた。一方で日本の多くの秋祭りと同様、米

や稲作と深い関連を持っている。祭の神事の中にも、随所に米との深い関わりが見出せる。

まず「どぶろく」祭りという別名からも明らかのように、この祭では「御神酒」の濁酒を祭のために製造することが特別に許可されている。前節では古式さながらの醸造方法を守って「御神酒造り」の神事を行なっていると述べた。「御神酒あがらぬ神はなし」という言葉があるように、日本の祭や行事は「酒が無くては成り立たない」ともいわれる²⁶。田島祇園祭では古式ながらの濁酒を製造して神に捧げるが、直会でも清酒が出され、人々は祭のハレの食事を共にする。またお党屋組の党本宅には祭の間、特別に神棚が設けられて神が宮司によって降ろされている。この神棚には、大きな鉢に入れられた米が供えられる。この米は祭の二日目に「御鉢前の神事」という神事でお祓いのために撒かれる。

田島祇園祭の一年最初の行事に、一月の「御党屋御千度」がある。その年の当番お党屋組が、祭の祈念のために神社へ赴く行事であるが、そこでは神事の後に「大盃廻し」が行なわれる。この行事は、非常に大きな盃に日本酒をたつぷりと注ぎ、お党屋組で廻し飲みするものである。当然のことながら、お党屋組の人達は千鳥足になり、家族の者が迎えに行かなければならない。

今年の令和元年度田島祇園祭の当番お党屋組は、御神酒の濁酒を漉した後、残った「酒かす」に川で採れたマスの切り身をのせ、昔のすしのように調理したもの（材料は同じ）を振舞った。組の女性の一人が「これ（酒かす）はおいしいものではないけれど、栄養もあって御神酒からとれた大事なものだから、処分せずに料理に再利用するの」と話す。

酒は特にその酩酊作用から、食料の中でも特別な位置づけをもって扱われてきた。神との交信に用いられるものであるとされる²⁷だとか、神に奉納するご神饌の中央には必ず日本酒が置かれている²⁸といった扱い方がある。「酒の席での無礼講」という、日常の関係を逆転させて交流を深めるやり方も日本の社会では広く浸透している。米も酒も、日本人にとっては古来より大切な食料で

あり、日本人や日本文化の象徴的な存在といえる。このように日本社会で特異な位置づけにある酒が、田島祇園祭にあっても御神酒の「どぶろく」をはじめとして、非常に特別な扱い方をされてきたことがわかる。それはこの祭が地場産業である米作や酒造りとの深い関連の中で継承されてきたことを示している。この町の人々にとって、昔からこの土地でとれる米は、神聖な土地の神と自然がもたらしてくれる大切な恩恵であり、その米を使って醸す日本酒もまた、神聖で特別なものだといえる。

柳川啓一は田島祇園祭を三度ほど調査して、この祭では「酒と食物が人と人のつながりを確かにする重要な「媒介」となる」²⁹と述べた。また「どぶろくが祭の決まった食事とともに出されることを考えると、そのつながりはいっそう重要な結びつきとなる」とも論じている³⁰。日本人と日本社会、そしてこの町の人にとっても神聖で特別な米と、米から作る年に一度のハレの日の御神酒は、祭を通じて様々な人々の間をつないでいる。米と酒の神聖さ、特別さを共有する日本人たちと地域共同体の人たちは、米や酒を媒介にした交流が特別で重要なものであるという感覚を共有している。そしてそのために、米や酒のある祭のハレの日の食事や直会に特別な意味を見出しているといえるだろう。一方、日常からつながる地域の人たちの間の人間関係もまた、年に一度の祭の中の御神酒、ハレの日の米と酒の食事を媒介として、神と人、あるいは人と人、ものと人との間のコミュニケーションを深めているであるとか、人々の間の結束と絆を新たに結び直しているといえる。

祭のため年に一度の「御神酒作り」で力を合わせることを通して、町の人々は結束と絆を新たにしてきた。さらに祭の中の特別な米と酒の食事を通じたコミュニケーションは、様々な人々の間を取り結ぶ媒介作用をもたらしている。そのような米と酒のもつ働きは、日本人と日本社会が古来より米を神聖視し、特別な位置づけで扱ってきたことに大きく依拠している。古くからこの地で行なわれてきた米作と町の主要産業である酒造りは、この町で生きる人々にとって米と酒をとりわけ

重要なものにしてきたといえよう。そしてそのことが田島祇園祭において、米と酒の特別で独自の位置づけと意味を生み出したのだといえるだろう。

7. 結語

日本の各地では、都市祭礼である京都祇園祭の格式に沿って様々な祇園祭が行なわれている。本稿でとりあげた田島祇園祭も、そのような地域における祇園祭の一つである。

この田島祇園祭が開かれる南会津町では、古くから米作を行なってきた。田島祇園祭は土地の神田の神を祀った農耕儀礼と、京都八坂神社の祇園祭の格式が融合した独自の形を築き上げ、その伝統と祭式を守り続けてきた。この伝統の祭を中心に支え担うのは、この町の住人の代表である「お党屋組」の人たちである。竹沢が「祭は民衆自身の手による自治と自立の象徴」³¹だと述べるように、地域共同体の祭を担い、その変容と継承を支えてきたのは、誰よりもまずこの地域共同体の人々であった。加えて、このような伝統の祭の変容と継続に大きな影響を与えてきたのが参拝客、観客をはじめ祭に参加する人たちすべてであるといえる。

この地で米作を行ない、生活を営む人々にとって、土地の田の神に米の豊作を感謝、祈願する農耕儀礼は、日常に接続した最も重要なハレの行事の一つであったろう。鎌倉時代の文治年間にこの地を治めた領主長沼氏が、京都八坂祇園神社の牛頭天王須佐之男命を招聘したことから、都市祭礼の祇園祭を模した田島祇園祭が行なわれ始めた。それ以降、土地の農耕儀礼と都市祭礼を融合させる形で展開してきたこの地域共同体の祭は、地域の人たちによる「お党屋組」という制度と結束によって、人々の生活に深く関わりながら継承されてきた。

他の祭にはあまり見られない、田島祇園祭における米の扱われ方にこの祭の独自性の一つを見出すことができる。この祭は別名「どぶろく祭」ともいわれるように、祭のために特別に御神酒の濁酒を製造することが許される。この町の人の手

による御神酒は神に奉納され、祭を訪れる人々にも振舞われる。この地で自分たちが作った米を用い、自分たちの手で御神酒を醸して神に捧げることは「自分たちが担い続ける祭」という点からも、人々が祭のために差異を越えて結束し「絆を新たに再構築する」という点からも、祭の担い手たちに大きな意義づけを与えることになるのではないだろうか。

地域の祭が共同体の人々の自治と自律の象徴であるとするれば、地域の祭における米のあり方や扱われ方の独自性には、この地で祭という非日常と日常とを密接に関わらせ暮らしてきた人々の、自治と自律の心映えが現れているとはいえないだろうか。日常の暮らしにある米は、古来より日本人の生活を支える大切な穀物であり続けてきた。地域共同体において人々の生活と米作が不分離であった時代、生活に密接に関わりながら継承されてきた祭の中に、米の特別視や地域に培われてきた伝統と価値観が入り込み、独自性のある祭を形作るようになったのは自然なことであったろう。

自分たちの手で作る田島祇園祭と、祭における御神酒など祭の中の独自性豊かな米の扱いは、この地に生きる人々の生そのものの表現とも捉えられる。祭の中の米のあり方にこの地域ならではの豊かな独自性を維持することに加え、祭に関わる人々が、祭に対しそれぞれに意義づけを行なうことは、地域の祭とともに生きる人々の生の意味にも通じていると考えられるのではないだろうか。

註

¹ 大藤時彦「解説」所収柳田國男『日本の祭』KADOKAWA, 2014年, 243p.

² 八幡和郎・西村正裕『「日本の祭り」はここを見る』祥伝社, 2006年, 247p.

³ 原田信男『コメを選んだ日本の歴史』文藝春秋社, 2006年, 107p.

⁴ 南会津町教育委員会『重要無形民俗文化財・田島祇園祭のおとうや行事』歴史春秋社, 1986年, 28p.

⁵ 「お党屋組」という祭の運営組織は、「御党屋組」、「おとうや組」などいくつかの表記があるが、本稿では「お党屋組」に統一して表記する。「お党屋組」のリーダー

である「党本」についても、「お党屋本」「御党屋本」という表記もあるが、以下本稿では「党本」に統一する。この党本は「お党屋組」の構成員から選ばれる。神社の側の指示を受けたり、祭礼格式に定められるということではなく、構成員の話し合いで決められる。

6 渡部力男「田島祇園祭の起こり」所収星野紘監修、日本郷土芸能協会編『日本の祭り文化事典』2006年、116p.

7 柳川啓一「祭りの神学と祭りの科学」所収岩波書店『思想』1971年11月号、岩波書店、1971年、64p.

8 南会津町教育委員会『重要無形民俗文化財・田島祇園祭のおとや行事』歴史春秋社、1986年、28p.

9 柳田國男「日本の祭」所収『定本柳田國男集第十巻』1969年、264p. (初出/弘文堂、1942年)

10 柳田國男「日本の祭」所収『定本柳田國男集第十巻』1969年、270p. (初出/弘文堂、1942年)

11 柳川啓一「祭りの神学と祭りの科学」所収岩波書店『思想』1971年11月号、岩波書店、1971年、62p.,65p.

12 南会津町教育委員会『重要無形民俗文化財・田島祇園祭のおとや行事』歴史春秋社、1986年、22p.

13 南会津町観光物産協会・南会津町役場商工観光課「会津田島祇園祭パンフレット」、2018年

14 室井康弘『会津田島祇園祭』歴史春秋社、1987年

15 南会津町教育委員会『重要無形民俗文化財・田島祇園祭のおとや行事』歴史春秋社、1986年

16 南会津町観光物産協会・南会津町役場商工観光課「会津田島祇園祭パンフレット」2018年

17 室井康弘『会津田島祇園祭』歴史春秋社、1987年、84p.

18 室井康弘『会津田島祇園祭』歴史春秋社、1987年88p.

19 大森重宣「祭りに浮かび上がる民族性と地域性」山田孝子、小西賢吾編『祭りから読み解く世界』英明企画編集、2018年、78p.

20 松下彰信「日本の祭りについての社会学的研究—高松市石清尾八幡宮の事例—」所収香川大学教育学部編『香川大学研究報告』第1部134号、香川大学教育学部2010年、66p.

21 南会津町教育委員会『重要無形民俗文化財・田島祇園祭のおとや行事』歴史春秋社、1986年、10p.

22 南会津町教育委員会『重要無形民俗文化財・田島祇園祭のおとや行事』歴史春秋社、1986年、182-183p.

23 神崎宣武『酒の日本文化』角川書店、1991年、46p. (初出/角川書店、1991年)

24 神崎宣武『酒の日本文化』角川書店、1991年、60p. (初出/角川書店、1991年)

25 以下、詳細は筆者のフィールド調査での聴き取りに

よる。

26 神崎宣武『酒の日本文化』角川書店、1991年、12p. (初出/角川書店、1991年)

27 北岡正三郎『物語 食の文化』中央公論社、2011年、149p.

28 神崎宣武『酒の日本文化』角川書店、1991年、20p. (初出/角川書店、1991年)

29 柳川啓一「祭りの神学と祭りの科学」所収岩波書店『思想』1971年11月号、岩波書店、1971年、64p.

30 柳川啓一「祭りの神学と祭りの科学」所収岩波書店『思想』1971年11月号、岩波書店、1971年、64p.

31 竹沢尚一郎「祭りと地域社会」所収綾部恒夫、桑山敬己編『よくわかる文化人類学』ミネルヴァ書房、2006年、129p.

・本稿は、修士論文『日本文化における「媒（なかだち）」としての米—田島祇園祭の事例を中心に—』(2018年)を加筆修正した。

(Received: October 17,2019)

(Issued in internet Edition:November 1,2019)